

③ 「尾瀬の高山植物」 2

下野綾子(テーマリーダー)

最初に尾瀬の空中写真を眺めながら、小泉先生のお話された湿原の凹凸(ケルミ、シュレンケ)や池塘の様子を確認した。

グループ討議に尾瀬高校の学生さんが入ってくれたので、まずは尾瀬高校の植生調査について聞かせて頂いた。

二〇〇八年より六ヶ月の間、月に一度の調査を行っている。木道沿いに一メートル四方の枠を置いて、その中の植物を記載する。卒業生が調査に参加することもある。それで、学生の自然に対する関心がしっかりと醸成されていることが伺えた。調査の結果は年に一度開催される群馬県理科研究発表会で報告するそうだ。調査を始めてから植生に大きな変化は無さそうとの所感だが、一部では笹が増えている場所もあるそうだ。なお笹の増加は、尾瀬に限ったことではなく、群馬県赤城山や北海道夕張岳などでも問題になっているとの報告があった。だが、その原因はよく分かっていない。乾燥化が一因とも考えられているが、その乾燥化は温暖化によるのか、あるいは自然の植生遷移によるものなのかは不明である。一方、

鹿の食害により笹が無くなっている山もあるということだった。

断片的ではなく、長期を見据えた定期的な調査は、自然の変化を知る上で重要である。そうした視点のもと、自然の調査を体系的に行っている例について紹介があった。

まず挙げたのが、北海道新聞社が主催するフラワーズウォッチングマラソン。略してフラワーズン。北海道の全地域を対象に、一斉に同じ日にどんな花が咲いているかを調べるイベントである。あわせて野生植物への悪影響が心配されている外来種セイウオオマルハナバチの調査もされている。一九九七年から五年ごとに開催されており、今年で四回目となるそうだ。すべてボランティアで調査がなされ、参加者は二九〇〇人にもなるとのこと。

次に紹介されたのが、埼玉県の調査。生物教員などを中心に、調査が委託されること。その他、県民参加生き物モニタリング調査なども取り組まれているそうだ。帰宅後、埼玉県のホームページを除いてみている印象をもった。今年度より県民参加型温暖化影響モニタリングも開始したそうだ。

今回のグループ討議では、尾瀬の話題に収束できず進行役として力不足であったが、興味をひく話題が多く出て、話題提供して下さった皆様に大変感謝している。感想としては、これからの自然を見守る主役は、研究者等の専門家だけでなく市民全員が大切な一員なのだ実感した。日本山岳は大きな団体であることから、こういった体系的な調査を行う体制が作られるなら、自然の変化を知るのに、大きく貢献できるだろう。

